

加害者を特定し難い、理由なき「いじめ」は、なぜ？

最近のいじめは、陰湿化、潜在化していると聞いていたので、副題「見えない『いじめ』を解決するために」が目にとまり、「教室の悪魔」を購読した。

著者は、児童相談所に勤務し、また、未開発国の児童相談所スタッフの指導も行っている心理カウンセラーである。

著者は、最近のいじめ報道では、「いじめの本質が殆ど伝わっていない」ので、「いじめの現実を認識するための事例を紹介し、なぜそうなるのかを解説した上で、子どもを守るための方法を端的に示す」ためにペンを執ったようである。

著者は、『『ひとり』対『クラス全員』』というのが、今の典型的ないじめのパタン」であり、ある日突然、立場が入れ替わるように、「誰もが被害者になり得るし、加害者にもなり得る」という。

それだけに、子どもは被害者にならないように、また、受ける被害がエスカレートしないように、被害を大人（親、教師）に極力隠そうとするという。

被害を大人に気づかれたり、大人に告げ口するということは、クラス内だけで通じるルール（？）の裏切り者になるので、子どもはそれだけは避けようと苦悩しているという。子どもが生存をかけてクラスに適応しようとする、大人では理解し難い、今の子どもたちのこの特有の異常事象を、著者は「教室の悪魔」と呼ぶのかも…。

大人は直ぐに「話してくれたら…」というが、口に出せない程、また、『『死んだ方が楽』』と思う程、現代のいじめは陰湿で悪質なのだ！』という。

メールでの加害者を特定し難いいじめのように、理由なきいじめ、等々。

しかし、そこは子どもだけに、裏切り者にはなりたくないが、気づいて欲しいと願っているという。

そのために、大人が気づくように、子どもの日常の変化のチェックリストが参考までに付帯資料として提示・解説されている。

また、大人ができること、なすべきことを、具体的に提言されている。

著者は、「いじめの解決に取り組むのと、責任を追及するのを同時に行うのは無理」と言い、まず「大人が覚悟を決めれば、いじめは解決する」というように、他者任せでなく、学校と親の具体的な対応・連携の事例も紹介している。

今日は節分。差別、虐待、いじめ、等の底流にある、誰かを蔑むことで自分を認知・肯定しようとする自分の内にいる鬼を、まずは「鬼は、外！」。人と共に生きようとする心である「福は、内！」。